

顧沅『聖蹟図』賛詩訓釈稿(下)

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門

<https://doi.org/10.15017/25159>

出版情報 : 文學研究. 109, pp.1-29, 2012-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

文学研究 第百九輯 抜刷
平成二十四年三月一日 発行

顧沅 『聖蹟図』 賛詩訓釈稿（下）

竹
村
則
行

顧沅『聖蹟図』賛詩訓釈稿（下）

竹 村 則 行

【凡 例】

- ・ 底本は清・顧沅『聖廟祀典圖考』所収「聖蹟圖」（綾装書局、一九九六年拙道光刊本影印）である。
- ・ 通し番号1〜68は訓釈者による仮番号である。
- ・ 四字題（【尼丘禱嗣】等）は、底本では図像中に示される（附載図像を参照）。
- ・ 四字題や賛詩の翻刻は努めて舊字體を用いたが、原文の異体字等を改めたところがある。
- ・ **通釈** は必ずしも逐語訳でなく、出典の内容に従って適宜主語や名詞等を補い、平易な意識に努めた。
- ・ **出典** は代表的なもの、**語釈** は最小限にとどめた。調査漏れについてご教示を請う。
- ・ 『聖蹟図』の孔子の呼称は聖・宣聖・聖人・素王等多様であるが、通釈では原則として「孔子」に統一した。
- ・ 本稿の前半「顧沅『聖蹟図』賛詩訓釈稿（上、1―36番）」は、『文学研究』一〇八輯に掲載した。
- ・ 訓読や解釈等に佐藤一好氏の「ご教示を得た。深謝する。なお残る誤読浅解は全て訓釈者が責めを負う。

37 【臨河返駕】我西我轅 將見簡子 至河而返 爲傷賢士

覆巢鳳遠 諱傷其倫 物類皆然 何況聖人

我れ我が轅を西し 將に（趙）簡子に見えんとして
河に至りて返るは 賢士を傷ふが為なり
巢覆れば鳳遠る 其の倫を傷ふを諱めばなり
物類皆然り 何ぞ況んや聖人をや

通釈

孔子は車を西に向け、晋の趙鞅と会見しようとしたが、黄河まで来ると急に車を返した。それは趙鞅が賢臣を殺害したことを聞いたからである。鳳凰が巢を荒らされれば巢から遠ざかるのは、同類が傷つくのを避ける為である。人も万物と同様であり、聖人孔子がそのようであることはいうまでもない。

出典

紀事は『史記』卷四十七「孔子世家」、『孔子家語』卷五「困誓」、『說苑』卷十三「權謀」、『孔叢子』卷二「記問」等に見える。

38 【東流喻徳】乾坤化機 寓目斯彰 逝者如斯 匪言可狀

聖懷偶感 江漢汪洋 處卑就下 道樞莫尚

乾坤の化機 寓目して斯に彰はる
逝く者は斯の如し 言の状ぶべきに匪ず
聖懷 偶ま感ず 江漢 汪洋たり
卑きに処りて下に就く 道の樞（これより）尚きは莫し

通釈

万物が変化する機関は見ればはつきりと現れる。孔子は川の水の流れを見て、「逝く者は斯の如し」と詠嘆したが、その妙理はなかなか言葉で表現できるものではない。孔子は滔々と流れる川の水が常に低きに流れることに感慨を催したが、その高尚な道理はこれ以上のものはない。

出典 紀事は『論語』子罕篇、『孔子家語』卷二「三恕」等に見える。

39 **【觀臺釋戮】** 嗟彼陳侯 陵陽妄營 殺民戮吏 妄擬周文

嗟 彼の陳侯 陵陽を妄りに營ぐ
民を殺し 吏を戮して 妄りに周の文（王）に擬

惟聖致詞 子來婉諷 臨刑獲釋 談言微中

惟だ聖のみ詞を致し 子ら來たりて 婉に諷せば
刑に臨むも 積くを獲たり 談言 微にして中れ

通釈

ああ、彼の陳の恵公は妄りに陵陽の台（墓地）を築き、庶民や官吏を多数殺害しておきながら、孔子の前で素知らぬ顔で周の文王を引き合いに出して質問した。孔子は返答して、恵公の暴挙をやんわり諷刺したので、恵公は処刑直前の者を急いで釈放した。孔子の談話における発言が見事に効を奏したのである。

出典

紀事は『孔叢子』卷一「嘉言」に見える。

40 **【禮衰去衛】** 陪臣弱魯 詐力強齊 所希售衛 或以濟時

何哉彼昏 面聖目鴻 見幾遐舉 義不苟容

通釈

魯では無力な臣下が魯を弱体化し、齊では詐偽が幅をきかせている。そこで孔子は衛国に自分を

陪臣 魯を弱くし 詐力 齊を強くす
希ふ所は 衛に售りて 或は以て時を濟はんことを
何哉 彼昏にして 聖に面して鴻をみる
幾を見ること 遠く挙がるも 義は苟にも容れず

宣伝し、社会に役立とうとした。ところが、その衛の靈公は凡庸な君主であり、孔子と対面しながら、目は空飛ぶ鳥に釘付けで気もそぞろ。孔子は就職の熱意は高かったが、その正義はついに世に容れられなかった。

出典

語釈 紀事は『史記』卷四十七「孔子世家」、『孔子家語』卷五「困誓」等に見える。○陪臣弱魯 詐力強齊 所希售衛 或可濟時 何哉彼昏：第三十二【次乘靈公】の表現（前稿（上）参照）と同様である。

41 **【在陳當阨】**

猗嗟聖道 丁此屢屯 既畏於匡 復厄於陳

猗嗟 聖道 此の屢ばの屯みに丁る
既に匡に畏れ 復た陳に厄しむ

君子固窮 處困而亨 再弦再歌 素位而行

君子固より窮するも 困に処して 而ち亨る 再ち弦し 再ち歌ひ 位に素して行ふ

通釈

ああ、道理を説いた孔子は何度も憂き目に遭った。匡では陽虎と間違われて苦難に陥ったし、陳蔡の間では強国の軍隊に囲まれて難儀した。君子とて固より困窮するものだが、孔子は困難に遭っても決してめげず、琴を弾きながら歌い、自分の境遇をよくわきまえて尽力した。

出典

語釈 紀事は『論語』衛靈公篇、『史記』卷四十七「孔子世家」、『孔子家語』卷五「困誓」、『說苑』卷十七「雜言」等に見える。○君子固窮：『論語』衛靈公篇に「子曰、君子固窮」とある。

○既畏於匡：第三十首【圍匡曲解】に「虎暴於匡 聖状偶同」とあるのを参照。○素位而行：自分の位置、境遇をわきまえて行動すること。『中庸』に「君子素其位而行」とある。

42 **【葉公問政】**

列國紀綱 尼父是師 楚雄南服 孰張孰弛

列国の紀綱 尼父はれ師たり

葉公秉政 雅慕特諮 遠來近説 江漢攸施

楚雄にして南服す 孰れか張り 孰れか弛む

葉公 政を乗るに 雅に慕ひて 特に諮る

遠くから来たり 近くは説ぶは 江漢の施す攸

通釈

列国は政治の要綱を定めようとして、孔子を師と仰いでその教えを聞こうとした。南国の雄たる楚では一体誰が政治の手綱を執るのか。楚では葉公が政務を執っていたが、葉公は孔子の名声を慕っていたので、特に下問があった。孔子は「政治の要諦は、身近な人が喜び、遠くから人が慕い寄つて来るようにすることです。」と答えたが、長江や漢水を含む天下の至る所でそうあつて欲しいものである。

出典

紀事は『論語』子路篇、『史記』卷四十七「孔子世家」、『孔子家語』卷三「辯政」、『說苑』卷七「政理」等に見える。

43 【反蔡迷津】 聖在濟人 周流不止 隱者潔身 潛藏不起

聖は人を済ふに在り 周流して止まず

隱者は身を潔くし 潛藏して起たず

仕兮止兮 各於其時 沮兮溺兮 豈能知斯

仕か止か 各おの其の時に於てす

沮や溺や 豈に能く斯を知らんや

通釈

孔子は乱世に生きる人を救おうとして、諸国を汗して周遊して説いて回っている。一方の隱者は身を清くしつつ、田野に引きこもつて世に出ようとしない。出仕するもしないも、それぞれ時の運がなせるもの、隱遁にこだわる隱者の長沮や桀溺などに、どうしてこの道理が分かるだろうか。

出典

『語釈』紀事は『論語』微子篇、『史記』卷四十七「孔子世家」等に見える。

44 【楚封見沮】 齊封尼谿 晏嬰拒之 楚封書社 子西沮之

齊（孔子を）尼谿に封せんとするや 晏嬰 之を拒
み 楚（孔子を）書社に封せんとするや 子西 之を

沮む

茫茫列國 竟誰與之 待價而沽 肯輕處之

茫茫たる列國 竟に誰か之と与にせん
価を待ちて沽らんや 肯て軽しく之に処らんや

通釈

齊の景公が孔子に尼谿の地を与えようとすれば宰相の晏嬰が反対し、楚の昭王が孔子に書社の地を与えようとすれば臣下の子西がこれを沮む。多くの列国の中で一体誰が孔子の真の見方になつたであろうか。孔子は「買ひ手がいれば進んで自分を沽る」と言ったが、決して軽々しく出処進退を決めたのではない。

出典

語釈 紀事は『史記』卷四十七「孔子世家」、『說苑』卷十七「雜言」、『孔叢子』卷六「詰墨」等に見える。○待價而沽：『論語』子罕篇に「子曰、沽之哉、沽之哉、我待買者也。」とある。第二十一首【杏壇設教】にも「沽哉沽哉 待價而起」と見える（前稿（上）参照）。

45 【接輿歌鳳】 兕虎載歌 鳳胡來儀 覽輝而下 德衰匪宜

雞啄鳳食 從政其類 含苞斂符 萬世之瑞

兕虎 載ち歌ふに 鳳胡ぞ来儀せん
輝を覽て下り 徳の衰へたるは宜に匪ず
雞啄み 鳳食らふ 政に従ふは其の類なり
苞を含みて符を斂むは 万世の瑞なり

通釈

楚国の野獸（隱者）たる狂接輿が孔子に出会い、狂歌を歌って通り過ぎようとした時、鳳凰たる

孔子はどうして礼儀を以て接しようとしたのか。それは、孔子は接輿の歌の美点を理解したので、わざわざ車を下りて接輿と会話しようとしたのである。従って狂接輿の狂歌に、孔子を「徳が衰えた」と歌うのは正しくない。鶏や犬のような俗物や鳳凰のような貴人が共に十分に食する、政治の要諦はそのようなもの。兆しのうちにその兆候を摘み取る、こうしてこそ万年の平和がもたらされるのである。

出典

【語釈】紀事は『論語』微子篇、『莊子』人間世篇、『史記』卷四十七「孔子世家」等に見える。

○兕虎載歌：『詩経』小雅「何草不黄」に「匪兕匪虎、率彼曠野」とある。

46 【季康幣迎】 轍環不已 周流倦行 季康幣迎 東魯待興

轍環りて已まず 周流して行くに倦む
季康 幣もて迎へ 東魯の興るを待つ

瞻彼太丘 枳棘何深 咏嘆交集 悲來填膺

「彼の太丘を瞻れば 枳棘何ぞ深き
咏嘆交ごも集まり 悲しみ来りて 膺を填む」

通釈

孔子は十四年もの間、弟子と共に車で天下を流浪して回った。最後には魯の大夫季康子が衛まで幣を以て来て、孔子を魯に迎え取り、魯を復興することを期待した。孔子はそこで「丘陵の歌」を作り、「あの魯の太丘（生地の尼丘山）を見れば、棘が深く生い茂っている。私はこれまでの流浪の生涯を顧みて感慨が湧き起こり、悲しみで胸が塞がる。」と詠嘆した。

出典

【語釈】紀事は『孔叢子』卷二「記問」に見える。「丘陵之歌」は『孔叢子』編者（不詳）の作と思われる。

47 【作猗蘭操】 蘭爲國香 衆芳罕伍 于野于朝 未得其所

蘭は国香たりて 衆芳 伍する罕きも

憂從中來 寄慨道左 援琴成操 一彈再鼓

野に于ける 朝に于ける 未だ其の所を得ず

憂は中より来たり 慨を道左に寄す

琴を援りて操を成し 一たび弾きて 再たび鼓す

通釈

山奥にひっそりと咲く蘭の花を見て、孔子は感慨を催す。「中国を代表する香り高い花の蘭は他の花とは比べ物にならないのに、民間でも朝廷でも、まだ誰もその本分を認める者がいない。」孔子は思わず胸中に憂いが湧き、道の辺の蘭の花に事寄せ、琴曲の猗蘭操作曲し、一回二回と続けてつま弾く。

語釈

出典 紀事は『樂府詩集』卷五十八「猗蘭操」に「古今樂録」「琴操」を引いて載録する。

48 【魯識羶羊】 不語有四 怪居其一 土缶有羊 不經之極

（孔子）語らざるに四（注：怪力乱神）有り 怪は其の一に居る

一に居る

土缶に羊有り 不經の極なり

博物知名 藻鑑莫京 聖本天縱 豈日多能

博物にして名を知る 藻鑑（これより）京なるは

莫し

聖 本より天縱にして 豈に多能なりと曰はんや

通釈

孔子は日頃、怪（怪談）・力（武勇）・乱（乱倫）・神（鬼神）の奇異な事を軽々しく口にしなかつた。怪はその筆頭である。ある時、魯の季桓子から土缶の中で見つかった動物について下問があり、孔子は羶羊だと回答したが、それこそまでもない怪異の最たる物である。孔子の博学多識による明快な鑑定は誰も真似できない。孔子は天賦の才能があるのであり、俗人が努力して得る多能

の域を超越している。

出典

語釈 紀事は『史記』卷四十七「孔子世家」、『孔子家語』卷四「辨物」、『說苑』卷十八「辨物」、
『国語』魯語下、『搜神記』卷十二等に見える。○不語有四：『論語』述而篇に「子不語怪、力、
乱、神。」と。

49 **【専車論吳】**

吳 麋會稽 巨骨是疑 使使聘魯 諮於仲尼

吳 会稽を麋ち 巨骨を是れ疑ふ
使をして魯に聘し 仲尼に諮はしむ

諸侯羣會 防風後至 禹戮専車 聖無不知

(答ふるに)「諸侯群会するに 防風 後に至る
禹戮して 車を専にす」と 聖の知らざる無し

通釈

越を攻めた吳が会稽を落とした際、拾った馬車一杯の巨大な骨の由来を知ろうとした。そこで使者を魯に使わして孔子に尋ねた。孔子は「昔、禹王の頃、諸侯が会稽山に会合した時、禹王が遅刻した防風氏を処刑しました。その遺骨が車一杯あったそうです。」と答えた。孔子は知らない物は無いのである。

出典

紀事は『史記』卷四十七「孔子世家」、『孔子家語』卷四「辨物」、『說苑』卷十八「辨物」、『国語』魯語下等に見える。

50 **【萍實對楚】**

楚伯諸侯 應在萍實 王舟獲焉 如斗如日

楚の諸侯に伯は(覇)たること 応は萍実ひらに在り
(楚)王の舟 焉これを獲たり 斗の如く 日の如し

陳野聞謠 歸使具述 其甘如飴 非聖莫識

陳の野に謠を聞きて 帰りし使ひ 具さに述ぶ

其れ甘きこと飴の如し 聖に非ざれば識る莫し

通釈

楚の昭王が諸侯の覇者になることは、実は萍の実の歌に既に歌われていた。その実は楚の昭王の舟が長江を渡る時に拾い上げた物であり、一升舂ほどの大きさで太陽のように赤かった。その実の由来を尋ねられた孔子は、曾て陳の野を通った際に地元の歌でそれを知ったことを述べ、使者が帰国してそのことを楚の昭王に逐一報告した。果たして孔子の言う通り、その果実は飴のように甘かった。孔子でなければこんなことは誰も知らない。

出典

語釈 紀事は『孔子家語』卷二「觀思（致思）」、『説苑』卷十八「辨物」等に見える。○伯：霸に同じ。

51 **【商羊知雨】**

水祥起舞 童謡預徵 來聘致問 商羊識名

水祥 起ちて舞ひ 童謡 預め徴す

來聘して問を致せば 商羊 名を識る

溝渠既濬 脩築在先 有備無患 霖雨晏然

溝渠 既に濬へ 脩築 先に在り

備有れば患無し 霖雨も晏然たり

通釈

「雨降らしの鳥が宮殿に来て舞っている。洪水になりそうだ。」童謡はこう予兆した。不思議に思った斉侯が、魯に使者を立てて孔子に伺ったところ、その鳥が洪水を予知する商羊という名の鳥であることが分かった。そこで、斉では用水路を浚えて防水施設を整備した。周到に準備したので洪水の被害はなく、長雨にも国土は安泰であった。

出典

紀事は『孔子家語』卷三「辯政」、『説苑』卷十八「辨物」等に見える。

52 **【蘧使谈心】**

衛有賢者 明哲保身 卷舒任運 寡過未能

衛に賢者有り 明哲にして身を保ち

卷舒 運に任す 過を寡くせんとするも 未だ能くせず

締交尼父 遣使致詞 與坐致敬 歎曲傳心

交を尼父に締ひび 使を遣はして詞を致す
坐を与へて敬を致し 歎曲して心を伝ふ

通釈

衛の蘧伯玉という賢者は、善悪や是非をよくわきまえて一身を全うし、出処進退は天運に委ね、過ちをなくすように努めてもなかなかできないことを反省していた。この賢者と交わりを結んだ孔子は、使者を通じて挨拶を交わし、使者に敷物を与えて蘧伯玉への敬意を伝え、打ち解けてじっくり話して自分の気持ちを相手に伝えた。

出典

語釈 紀事は『論語』憲問篇に見える。○明哲保身：『詩経』大雅、烝民に「既明且哲、以保其身」とある。○歎曲：打ち解けてじっくり話す。歎曲。

53 【貴黍賤桃】 郊廟薦登 黍爲之長 桃屬下菓 詎反居上

以貴雪賤 乖反失尚 食賜後先 位置允當

郊廟に薦登す 「黍之が長たり
桃 下菓に属するに 詎ぞ反つて上に居らんや
貴を以て賤を雪ぬふは 乖反して 尚たうときを失す
食賜はりて後先す」と 位置 允まことに当れり

通釈

孔子は魯の哀公の郊祭や宗廟における供物を勧められた際に、黍の後に桃を食して左右の臣下に笑われた（黍は食用でなく、桃の毛抜き用である）。孔子の考えはこうだ。「黍は五穀の長であり、桃は最下位の果物だ。なのに、どうして下位の桃が上位にあるのか。黍のような高貴な物で桃ごとき卑しい果物を拭うことは上下の理に背く。礼祭の供物は先後上下を取り違えている」と。孔子

の対応はまことに正当であった。

出典

紀事は『孔子家語』巻五「子路」、『韓非子』「外儲説」左下等に見える。○位置：処置、布置。

54 **【観蜡論俗】**

百日之勞 一日之樂 民力既勦 與以息作

百日の勞 一日の樂

民力既に勦^ぶるれば 与へて以て作を息^{やす}む

爲張爲弛 文武之治 観蜡於郷 王道易易

張を爲し 弛を爲すは 文武の治なり

蜡を郷に観て 王道易易たり

通釈

民は百日もの長い間の農作業の苦勞を、一日の臘祭で一氣に晴らそうとする。農作業の疲れを、しばし休息を与えて回復するのだ。このように弛めたり締めたりするのは、周の文王・武王の治政の要諦である。こうして郷里の臘祭を見れば、王道の実行も容易であることが分かる。

出典

語釈 紀事は『孔子家語』巻七「観郷射」、『礼記』雜記下等に見える。○観蜡於郷 王道易易：『孔子家語』巻七「観郷射」に「吾觀於郷、而知王道之易易也。」とある。易易はたやすいの意。

55 **【筮賁損益】**

吉凶悔吝 易理咸該 韋編三絶 誦此不衰

吉・凶・悔・吝 易の理 咸^{ことごと}く該^{しか}り

韋編三絶するまで 此を誦して衰へず

損必自益 天之道也 筮而得賁 聖之時哉

損すれば必ず自ら益するは 天の道なり

筮して賁を得るは 聖の時なるかな

通釈

孔子は自ら筮卜で占い、吉・凶・悔・吝の卦を自分で占った。易には全ての道理が備わっているのだ。孔子は『易経』を何度も倦まず熟読し、ためにその綴じ紐がたびたび切れるほどだった。

物事は減衰すれば増加に転じるのは天の道理である。占いで吉卦の賁を得て自ら戒めたのは、孔子であればこそだ。

【出典】

語釈 紀事は『孔子家語』卷二「好生」、『說苑』卷二十「反質」、『呂氏春秋』慎行論「壹行」等

に見える。○吉凶悔吝…『易経』繫辭伝上に「吉凶者失得之象也。悔吝者憂虞之象也。」とある。

○損必自益…『易経』に損、益の卦がある。○韋編三絶…『史記』「孔子世家」に「孔子晩而喜

易、く讀易、韋編三絶。」と。

56 **【夢見周公】 定官制禮 先魯元公 神交已久 寤寐相通**

官を定め 礼を制せり 先魯の元公

神交已に久しく 寤寐相ひ通ず

袞寫致思 吐握兆夢 傷嗟遲暮 明良不逢

袞寫に思ひを致し 吐握（周公）夢に兆る

傷嗟す 遲暮して 明良に逢はざるを

【通釈】 孔子は官位や儀礼を制定した魯の開祖たる周公旦を尊崇し、久しい間、寝ても覚めても夢で交わり通じた。ひたすら周公を慕い続け、食事中も髪を整える間も賢人を求めた周公の姿を追い続けた。それが、老齡を迎えた孔子が周公の夢を見なくなり、明君や賢臣とも出会わなくなったのは何とも悲しいことだ。

【出典】

語釈 紀事は『論語』述而篇、『史記』卷四十七「孔子世家」等に見える。○袞寫…袞服と寫履。

王服。ここでは周公を指す。○吐握…吐哺握（捉）髪。周公が賢人を求めて、食事の間も、髪を整える間も惜しんで賢人との面会を求めた故事。『史記』卷三十三「魯周公世家」に「我一沐三捉髪、一飯三吐哺、起以待士、猶恐失天下之賢人。」とある。

57 【杖叩原壤】 記嚴不敬 詩刺無儀 坐立必恭 倨傲非體

（礼）記は敬せざるを嚴しめ 詩（経）は儀無きを刺る

坐立は必ず恭しくすべし 倨傲は礼に非ず

何哉故人 禮法不聞 虚忝歲月 以杖示懲

何ぞや 故人（原壤） 礼法を聞かず

虚しく歲月を忝くすれば （孔子）杖を以て懲を

示せり

通釈

『礼記』は敬に悖る行為を戒め、『詩経』は儀礼に背くことを諷刺する。人は日常の動作においても必ず礼儀正しく、敬い慎まなくてはならない。傲り高ぶった非礼の行為をしてはならない。ところが孔子の旧知の原壤は、礼法などどこ知らず（あぐらをかいたまま孔子を迎えようとした。その行為に對して、孔子は「お前は空しく歲月を盗む賊だ」と評し、杖で叩いて戒めようとしたのである。

出典

語釈 紀事は『論語』憲問篇に見える。

58 【經成錫瓊】 昭事上帝 北斗維樞 著述既備 告成允宜

上帝に昭事し 北斗 維れ樞なり
著述 既に備はれば 告成すること 允に宜し

赤虹下化 黄玉出章 載拜祗受 天錫素王

（上帝）赤虹を下化せしめ 黄玉もて章を出す
載ち拜して 祗だ受くるは 天 素王（孔子）
に錫ふなり

通釈

孔子は日頃から謹直に天帝に仕え奉っていた。中でも北斗星は枢要の星座である。孔子は『孝経』や『春秋』等の著述を完成させると、天に向かつて恭しく祈りを捧げた。するとこれに応じた天

は、真つ赤な虹を天から下ろし、それは文字の書かれた黄色の玉となった。孔子はそれを拝礼して受けた。天が無冠の王たる孔子に勳章を授けたのである。

出典

語釈 紀事は『宋書』卷二十七、符瑞志上、緯書の「孝經右契」「春秋緯演孔図」（春秋孔演図）等に見える。○昭事上帝：謹直に天帝に仕える。『詩経』大雅「大明」に「昭事上帝、聿懷多福」とある。

59 **【互郷與潔】 聖教無私 誘掖引導 童子何知 小子有造**

聖教 私無く 誘掖して引導す
童子何ぞ知らん 小子も造す有るを
春風 化雨 明らかに示して門に及ぶ
既往を咎めず 維新に嘉し与す

通釈

孔子は誰に対しても分け隔てなく教え、これを啓発して導いた。互郷の童子も見知らぬ小童も、彼らが将来どう成長し発展するかは予想できないのである。春の雨風が万物を育むように、その公明な指導は一門の内外に及んだ。孔子は相手の過去の経緯を咎めることなく、新進の意気に期待した。

出典

語釈 紀事は『論語』述而篇に見える。○不咎既往：『論語』八佾篇に「子聞之曰、：既往不咎。」と。

60 **【刪述六經】 轍環天下 道不可行 曰歸乎來 脩我典型**

轍は天下を環るも 道は行ふべからず
曰く「歸りなん乎來 我が典型を脩めん」と
三千從遊し 七十の高弟あり

六経を刪述して 憲を万世に垂れたり

通釈

天下を遊説した孔子だが、その教えが諸国で採用されることはなかった。そこで孔子は「郷里の魯国に帰って典籍の編修を始めよう」と言った。こうして、これまでの遊説に従った三千人もの弟子、經典に精通した七十二人の高弟が協力して、六経を編纂し、偉大な教えが万世に伝わることになったのである。

出典

語釈 紀事は『史記』卷四十七「孔子世家」等に見える。○刪述六経 垂憲萬世：明・陳鳳梧の賛に「刪述六経 垂憲萬世」とある。

61

【西狩泣麟】

王降而霸 雅亡而風 麟出斃矣 吾道其窮

王は降りて霸となり 雅は亡びて風となる
麟出でて斃たふれたり 吾が道 其れ窮せり

既歌以哀 復史以彰 匪徒物感 實爲世傷

既に歌ひて以て哀しみ 史を復して以て彰はず
徒ただに物に感ずるに匪わず 實に世を傷むが為なり

通釈

春秋の乱世には天下を統べる王者がいなくなり、諸国をまとめる覇者が乱立した。その結果、天下を教化する雅道が亡び、一国個人を重んじる風潮が蔓延した。太平の世に出現する麒麟が獵師に撃たれて死んだのを見て、孔子は「我が道はついに極まった。」と言って嘆いた。郷里の魯に帰った孔子は「丘陵の歌」を歌ってそのことを哀しみ、『春秋』の史書を著してその道理を明らかにした。これらの歌や史書は、単に孔子が物事に感銘を受けたからではなく、実に世道人心の衰退を嘆いたからなのである。

出典

語釈 紀事は『春秋左氏伝』哀公十四年、『史記』卷四十七「孔子世家」、『孔子家語』卷四「辯物」、

『孔叢子』卷二「記問」等に見える。○雅亡而風：『詩經』大序に「是以一國之事、繫一人之本、謂之風、言天下之事、形四方之風、謂之雅。」とある。○既歌以哀：魯に帰った孔子が歌った「丘陵の歌」を指す。『孔叢子』卷二「記問」、また第四六首【季康幣迎】賛参照。

62 【夢奠兩楹】梁折山頽 哲人斯萎 聆子之歌 知道之哀

「梁は折れ 山は頽れ 哲人斯に萎わふ」

子の歌うたふを聆きき 道の衰へたるを知る

逍遙於門 奄然而病 藏往知來 達生知命

門に逍遙して 奄然として病む

往を藏して來を知り 生を達して命を知る

通釈

孔子はその死に臨み、「家の梁の木が壊れ、泰山が崩れ、哲人が倒れる。」と歌った。子貢がその歌を聞き付け、孔子の道が終わろうとしているのを知った。孔子は門前を逍遙しながら歌い、そしてにわかになんで病んで息を引き取った。まことに孔子は古人の智慧をその胸中にしまい、未来のあべき姿を洞察し、人生を達観し、自らの天命をわかまえて知っていたのである。

出典

語釈 紀事は『礼記』檀弓上、『史記』卷四十七「孔子世家」、『孔子家語』卷九「終記解」等に見える。○藏往知來：『易経』繫辭伝上に「神以知來、知以藏往」とある。○達生知命：『易経』繫辭伝上に「樂天知命、故不憂。」とある。また顔之推『顔氏家訓』卷三「勉学」篇に「欲其觀古人之達生委命」と。

63 【心喪廬墓】從游三千 恩義並全 若父無服 心喪三年

從游するもの三千 恩義並びに全し

父の若くにして（喪）服無し 心喪すること三年

既訣而離 哀思孔悲 賢哉賜也 六載相依

既に訣わかれて離るるに 哀思 孔だ悲し
賢なるかな賜（子貢）や 六載相ひ依る

通釈

孔子に付き従った弟子はしめて三千人、いずれも孔子に慈父同様の恩義を感じていた。そこで孔子の葬儀の際には、弟子達は他人の場合のような弔服にせず、実父に対するような喪服にし、実の父を亡くした時と同じく、三年の喪に服した。やがて喪が明けて孔子墓を去る時になると、弟子達は悲哀の念に堪えられなかった。賢明にも一の弟子の子貢は更に三年の喪を重ね、計六年もの間、孔子墓に寄り添ったのである。

出典

語釈

紀事は『史記』卷四十七「孔子世家」、『孔子家語』卷九「終記解」等に見える。

64 【塚誌興亡】

儒教其窮 時值祖龍 聖有先覺 塚識其踪

儒の教へ其れ窮するは 時 祖龍（秦始皇）に値
る

沙丘殄滅 適殞厥躬 何傷日月 二世覆宗

聖 先覺有りて 塚に其の踪あとを識せり
（秦始皇）沙丘に殄滅し 適まさに厥その躬みを殞そこなへり
何ぞ日月を傷やぶらんや 二世にして宗を覆す

通釈

秦の始皇帝の時世に、儒教は大変な災禍に見舞われた。孔子は予めこのことを知り、自ら墓中の墓誌にそのことを記した。その予言通り、始皇帝は旅先の沙丘で死去した。日月のように尊い孔子の予言がどうして外れることがあるう。果たして秦は二世の胡亥に至って忽ち覆滅してしまっただのである。

出典

語釈

紀事は『論衡』実知篇、金・孔元措『孔氏祖庭広記』卷九に見える。○祖龍：秦始皇帝を

指す。○何傷日月…『論語』子張篇に「其何傷於日月乎。」とある。

65【漢高崇祀】

穆穆廟庭 聖德斯尊 肅肅衣冠 聖澤斯存

穆穆たる廟庭 聖德斯れ尊し 肅肅たる衣冠 聖
澤斯れ存す

漢祖崇儒 躬拜闕里 太牢之祀 百代伊始

漢祖は儒を崇び 躬みづから闕里に拝す
太牢の祀 百代なるは伊より始む

通釈

森嚴たる孔子廟には孔子の遺徳が満ち渡っている。ここには孔子の衣冠が宝藏され、孔子の徳沢が嚴然として備わっている。儒教を尊崇した漢の高祖は、ここ闕里で自ら孔子像に拝礼した。以後百代も続く太牢の祭祀はここから始まったのである。

出典

語釈 紀事は金・孔元措『孔氏祖庭広記』卷四、明・李東陽「詩禮堂銘」等に見える。○太牢之祀：牛羊豚の犠牲を供える古代の祭祀。

66【壁藏謨典】

共王廣宅 妄覬孔林 金石絲竹 倏爾發音

共王 宅を広めんとし 妄りに孔林を覬のぞむに
金石絲竹 倏爾として音を發す

道有神護 莫逞其雄 伏生再啓 典謨聿崇

道に神護有れば 其の雄を逞たくましくする莫なし
伏生 再び啓きて 典謨 聿いつに崇たつとし

通釈

魯の共王が宮室を広めようとして孔子の旧宅を壊したところ、壁の中から金や石、管弦の妙なる音が響いたという。孔子の説く道には常に神の加護があり、俗人がこれを乱すことは許されない。まことに尊い秦の伏生が書いた『古文尚書』が、焚書を免れて再び蘇ったのである。

出典

【語釈】紀事は『漢書』卷五十三、景十三王伝、恭王（共王）に見える。○伏生…秦の博士。山東出身。漢にも仕えた。焚書を避けて孔宅の壁に埋められた『古文尚書』が後世に伝わった。

67 【鍾離完璧】魯相脩廟 獲璧維七 張伯懷一 自謂計得

魯相（鍾離意） 廟を修するに 璧を獲ること維
れ七

張伯 一を懷（ふ）にし 自ら計り得たりと謂ふ
甕を啓（ひ）けば 丹書あり 夫子 預（あ）め知れり
至誠の達化 睿照して遺（な）す靡し

通釈

後漢の魯の宰相であった鍾離意が孔子廟を改修した時、門下の張伯が発見した七枚の玉璧の一枚をくすね、六枚を発見したと鍾離意に報告した。併せて出土した甕を啓くと、中に丹書があり、孔子はこの 謀（はかりごと）を予知していたのである。孔子の深い思いや優れた明智は全てに通曉しており、何事も見落とすことがない。

出典

【語釈】紀事は『後漢書』卷四十一、鍾離意伝に付載する鍾離意別伝に見える。

※（顧沅本は、【孔廟植楡】と題して、ここに半葉の楡図、次の半葉に文八十一字、銘百十八字を載せる。賛詩は無い。）

68 【眞宗拜祀】惟宋眞宗 屈身忘貴 過魯崇師 登堂奠拜

惟れ宋の眞宗 身を屈して貴を忘る
魯を過りて師を崇（た）び 堂に登りて奠（た）し

加謚文宣 禮儀具備 百世楷模 千秋共戴

文宣を加謚し 礼儀具備す 百世の楷模きはん 千秋共に戴く

通釈

大中祥符元年（一〇〇八）、北宋の真宗は泰山封禪の旅途に曲阜の孔子廟に参詣し、皇帝の身分を忘れて素王たる孔子像に拝礼した。そして孔子に文宣公という謚号を与え、祭礼一式を整えた。この厳粛な儀式は、その後百代も千年も続く孔子祭礼の規範となつて今日に至っているのである。

出典

語釈 紀事は『宋史』巻七、真宗二、『続資治通鑑』巻二十七、宋紀二十七等に見える。

(補記) 二〇一一年一月、杜曉勤先生の案内で、北京大学図書館蔵『聖蹟全圖』⁽¹⁾（康熙二十五年識語。図像は七十六図）

を拝見できた。該書は、右頁を図像、左頁を賛文で組み、且つ図像中に四字の賛題を組み込む体裁である。一見して、清末・顧沅『聖蹟図』⁽²⁾（図像は六十八図）との強い影響関係を伺わせる。更なる精査が必要であるが、この判断が正しければ、『聖蹟全圖』は顧沅『聖蹟図』が手本とした先行『聖蹟図』（またはその系統本）となり、筆者が先に発表した拙論「明清文学史から見た顧沅の『聖蹟図』賛詩」⁽²⁾は論述の訂正を迫られる。当日は慌ただししい調査であつたので、後日の精査を待ち、備忘のために補記する。

(補注)

(1) 康熙二十五年識語。御製の四子賛は紅印。図像は七十六図。『北京大学図書館蔵古籍善本書目』（北京大学出版 七頁に、書名を「聖蹟圖」とするのは、正しくは「聖蹟全圖」である。図書番号一一・一一一／一六八六。二冊。なお、北京大学図書館所蔵『聖蹟図』の調査報告書として次のものがある（佐藤一好氏示教）。

李雲「孔子『聖迹図』絵刻与収蔵初探」（『長沙大学学报』一九一一、二〇〇五年）

(2) 『日本中國學會報』第六十三集、日本中國學會、二〇一一年。



38 東流喻德



37 臨河返駕



40 禮衰去衛



39 觀臺釋教



42 葉公問政



41 在陳當阨



44 楚封見沮



43 反蔡迷津



46 季康幣迎



45 接輿歌鳳



48 魯識羶羊



47 作猗蘭操



50 萍實對楚



49 專車論吳



52 蓮使談心

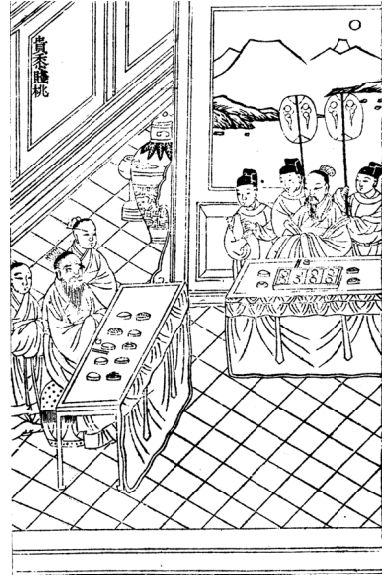


51 商羊知雨



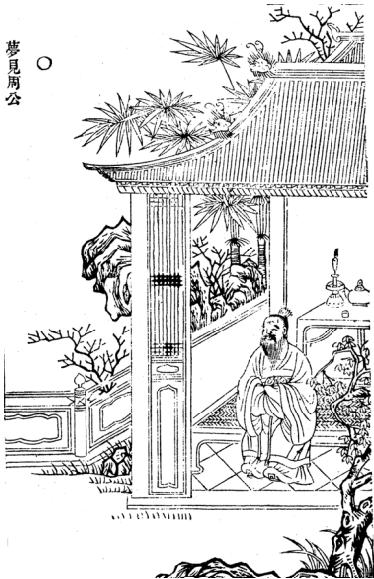
觀蜡論俗

54 觀蜡論俗



貴黍賤桃

53 貴黍賤桃



夢見周公

56 夢見周公



筮賁損益

55 筮賁損益

經成錫瓊



58 經成錫瓊

杖叩原壤



57 杖叩原壤



60 刪述六經

互鄉與潔



59 互鄉與潔



62 夢奠兩楹



61 西狩泣麟



64 塚誌興亡



63 心喪廬墓



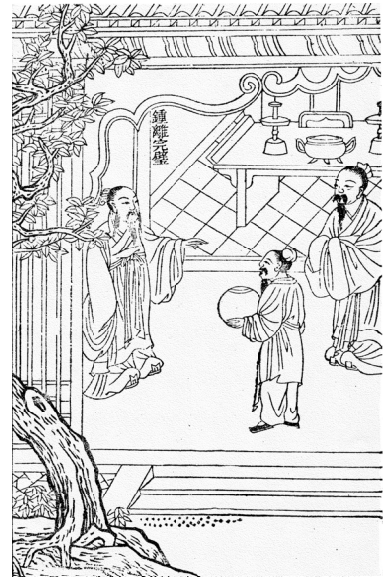
66 壁藏謨典



65 漢高崇祀



68 眞宗拜祀



67 鍾離完壁

